

ランチョンセミナー X世代からZ世代へのHBO事故の温故知新 ～今だから語れる事故の真実～

右田平八

九州保健福祉大学 生命医科学部 生命医科学科

日照りと水不足で名古屋城のツツジ全てが枯れたとニュースになった。その7月に名古屋大学の鶴舞講堂で日本中のHBOに従事する技師、看護師を集めた、いわゆる「名古屋詣」に私は居た。木造の校舎は歴代の教授が集う由緒ある講堂らしいが、扇風機が生温い空気をただ掻き廻すだけで額に汗しながら終日講義を聴いた。当時の学会理事長 榊原欣作先生(2011年没)は開口一番に「君たちの仕事は患者さんを観ることだ。目を瞑る間を惜しんで患者さんを観ていなさい。」と言われた。偶然に席が隣になったN技士さんと仲良くなり、講習期間中はHBO業務の問題点について語り合った。N技士さんの病院での実情に不安があったので、事故が起きないようにお互い努めましようと言って別れた。その年が明けた1996年2月21日午後3時5分にあの大事故が起きた。「山梨厚生病院HBO装置爆発事故」である。恐々としながらニュースを見た時にN技士さんの名前があって愕然とし、無事を祈った。名古屋詣の不安が的中して榊原先生が言った「患者さんを観る」の意味が理解出来た。今から28年前の話である。

時は2002年2月にSM大学病院で第1種装置でのHBO中に使用した人工呼吸器の不具合で患者さんが緊張性気胸を起こす事故が起きた。私は学会の事故調査委員長 眞野喜洋先生(後の理事長)の指名を受けて技師系委員として参画した。私の結論は単純なヒューマン・エラーの事故であると主張したが、「第1種装置用人工呼吸器不具合発生に伴う調査報告ならびに見解(日高圧医誌2002.Vol.37 No.4)」には樹脂製逆止弁のクラックが原因とすり替わっていた。これにより2004年の安全基準改定で第1種治療装置での人工呼吸器使用が突如禁止されるに至った。合点の行かない私は2004年6月に鹿児島で開催された「高気圧酸素治療安全協会 教育セミナー」に当時理事長の

恩田昌彦先生(2002年没)と安全協会長の眞野喜洋先生(2014年没)が講演に来られることを知って、人工呼吸器使用禁止を問うために夜行バスに飛び乗って鹿児島に赴いた。結局、納得のいく回答は得られず、救急医学会雑誌に「HBO環境下に於ける人工呼吸器のpitfalls」を投稿し、大権威の八木博司先生(2018年没)の目に触れて厳しく論文指導を受ける事になり、若年を過ぎたが学位取得への端緒となった。

時代のHBO事故を傍観者と当事者として経験し、今となってはおそらく防げた事故に相違ない。我々X世代からZ世代へのHBO事故の温故知新として、東大事故、山梨事故、人工呼吸器使用禁止の証言として、今だから語れる事故の真実を伝えるべくお話ししたい。